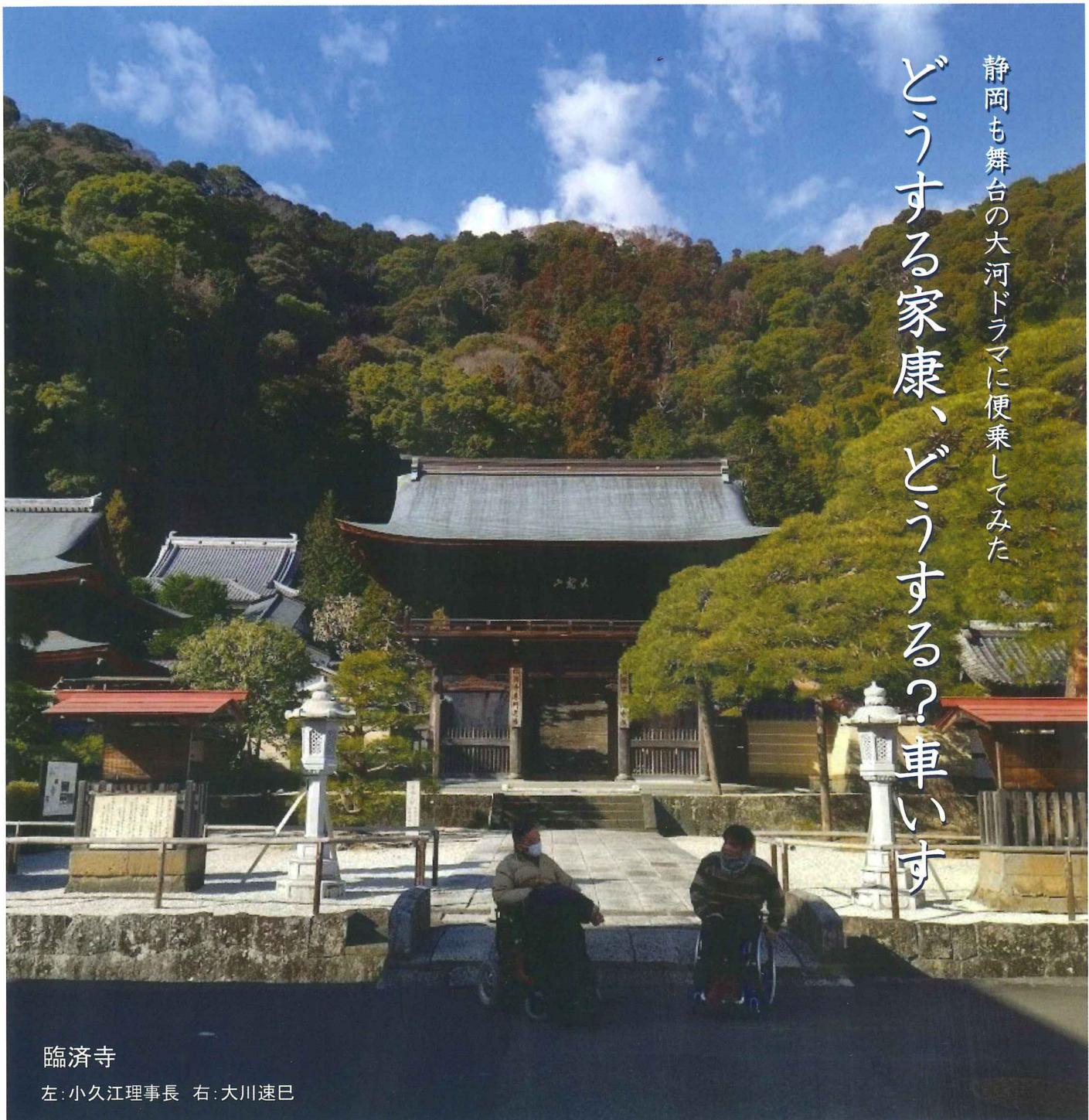


静岡も舞台の大河ドラマに便乗してみた

どうする家康、どうする？車いす



臨済寺

左：小久江理事長 右：大川速巳

ひまわり通信

Vol.12 2023.3.

“どんなに重い障害があっても地域で共に生きる社会”を目指して

発行：特定非営利活動法人 ひまわり事業団

静岡障害者自立生活センター

〒422-8006 静岡市駿河区曲金 5-4-58

TEL : 054-288-6068 FAX : 054-287-4922

E-mail : himawari@scil.jp HP : <https://www.scil.jp>

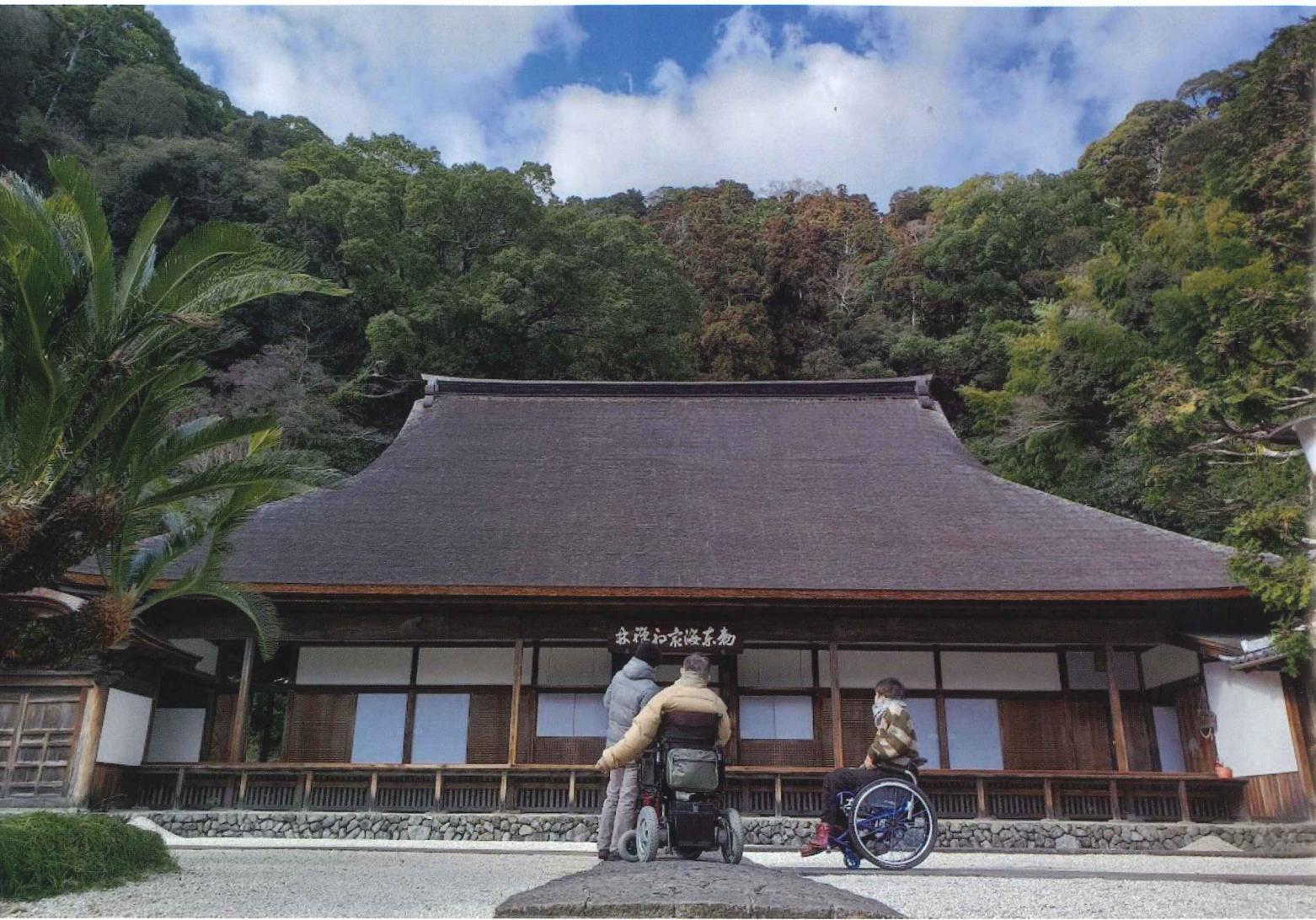


「どうする家康、どうする？車いす」

第一回 竹千代時代編

大河ドラマ「どうする家康」の放映が始まり、年明け早々から静岡が盛り上がっている。家康役を演じる“松潤”こと松本潤が、静岡を訪れ、家康ゆかりの地を次々と訪ねたりして、このところほぼテレビに出でっぱりの状態だ。

三年目に入ったこの機関紙の「静岡旅シリーズ」であるが、せっかくならこの“家康フィーバー”に乗つかろうと、今年一年のテーマは「家康旅」で行くことに決めた。



～竹千代の足跡を辿る～

今年の「静岡旅」のタイトルは、「どうする家康、どうする？車いす」。

大河ドラマ「どうする家康」にあやかり、静岡市内の家康ゆかりの名所を車いすで突撃取材し、そこがどのくらいバリアフリーかをレポートするという企画だ。

そもそも、城や神社仏閣、古戦場や古の建造物といった“歴史的名所”というのは、バリアだらけであることが多い。“誰もがいつでも分け隔てなく…”とい

うバリアフリーやインクルーシブといった福祉概念はほんのここ数十年で育まれた考え方。長い長い人類の歴史から見れば、まばたき一瞬のことなのだから仕方がない。

前置きはさておいて、この連載企画、家康の生涯に沿って進めていこうと思う。

第一回目は、竹千代時代編。竹千代と呼ばれていた家康が、今川家の入質として過ごした臨済寺と、元服式を行った浅間神社を中心にまわるコースだ。

最後に、 “竹千代手習いの間” が再現されていると
いう駿府城公園内の東御門・異 檻たつみやぐら に立ち寄る予定。



…な～んて展開になるだろう、と半分期待？していたのだが、現地へ行ってみると、ナナッ！なんと、あの長～い石段から一つ塀を隔てた横に、スロープ状の小道があるではないか。

それも、いかにもスロープという感じのものではなく、景観にも配慮された小径といった風情のもの。

ちょっと傾斜が急ではあるが、車いすでも登れて、小さなお堂やら樹木を眺めながら進んでいくと、そのまま自然に本堂までたどり着けてしまった。

思いも寄らぬ展開に、取材班はしばしボーゼン。

「やるじゃん臨済寺。本堂まで来れちゃったじゃん…」

高い石段のてっぺん、本堂から眺める駿府城公園と静岡の街並みは格別なものがあった。

帰りに山門の所で、ちょうど修行僧らしき若者に出会つたので聞いてみた。

先ほどのスロープは、どうやら10年ほど前に住職の意向で設置されたとのこと。

「住職けっこいい人じゃん♥ケンカしなくて良かった（ほっ）」

～浅間神社で大河ドラマ館に入る～

臨済寺前から浅間神社までは、静岡浪漫バスで移動した。

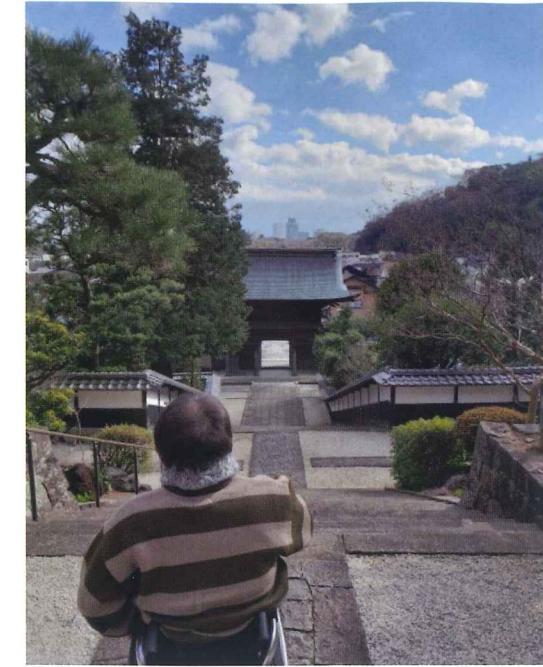
静岡浪漫バスとは、静岡市街地観光周遊バスのこと。JR静岡駅を基点に、市内の観光ポイントを結んで循環している。どれだけ乗っても大人一回200円。小さなコミュニティバス（通称こしづ）だが、スロープを出してくれて、車いすでも問題なく乗車することができた（一台のみだが）。

浅間神社は、あちらこちらに松本潤のパネルが設置され、すっかり大河ドラマ仕様になっていた。取材班は、神社の境内を散策して、大河ドラマ館に入館した。

「あれっ？なんか見覚えあるぞココ…」それもそのはず、この大河ドラマ館は、浅間神社内に元からあった文化財資料館を「どうする家康」放映期間だけ急ごしらえで“変身”させたものだったのだ。

館内には、ドラマを彩る数々の有名タレントたちのプロフィール写真、サイン色紙、ドラマで実際に着た衣装などが展示され、ドラマのテーマ曲がバックに威勢よく流れしており、実に煌（きら）びやかな雰囲気。小久江理事長いわく、「以前は薄暗いジメジメした館内に古い鎧甲冑なんかが展示されているだけのジミーな博物館だったのに…」

あまりの変貌ぶりに驚いている様子だった。



大河ドラマ館の説明によると、家康は三河（愛知県）出身であったが、よほど静岡がお気に入りであったようで、その75年の生涯で三回に渡って静岡に住んでいた。

最初は今回取材した竹千代時代（11年間）、次は浜松から駿府に移ってから小田原合戦の後に秀吉によって関東に国替えを命じられるまで（4年間）、そして最後は將軍職を秀忠に譲ってからの大御所時代（10年間）。これらを通算すると25年。つまり家康は、人生の三分の一を静岡で過ごしたことになるのだ。

よほど静岡が気にいったんだねえ～家康くん♥たしかに、海も山も近くにあって、気候は温暖で住みやすいもんね。

～浅間通りを歩き、 シャトルバスで駿府城公園へ～

ところで、浅間神社の前には、いわゆる門前町である浅間通りがのびている。

こちらの商店街も家康人気にあやかろうと、町をあげての大賑わい！！！…と、いきたいところだが、意外と静かで閑散としている。「どうする家康」の、のぼり旗がアチコチにはためいているが、人影の方はまばらだ。

「人よりのぼりの方が多いじゃん…」一人、二人、三人…ためしに数えてみたら、たしかにのぼり旗の方が多かった。

ここで取材班は二手に分かれた。

大川部隊は、商店街で名物の静岡おでんを食べ、一方の小久江部隊はシャトルバスで駿府城公園へ向かった。このシャトルバス、浅間神社と駿府城公園を結び、大河ドラマが放映される1年間だけ運行される期間限定の無料バス。

「オッ！静岡市、ヤル氣あるじゃん！でも車いすで乗れるのか？」そんな心配も杞憂（きゆう）に終わった。やって来たバスにはしっかり車いすのマークが。

〈インフォメーション〉

- ①臨済寺 無料。駐車場あり。車いす対応トイレは無し。「竹千代手習いの間」（ホンモノ）は年に2回の特別公開日のみに見ることができる。
- ②静岡浪漫バス。乗車料は大人1回200円。障害者と介助者1名まで半額。
- ③浅間神社 無料。大河ドラマ館は、大人1名400円。市内在住者は200円。障害者と介助者1名までは無料。



今回の取材、最初の難関であるはずの臨済寺がクリアできた後は、思いのほかスイスイと進んでしまった。「車いすでどこでも行けるなんて、時代は変わったんだねえ～」

でも、最後にオチが待っていた。
駿府城公園の東御門・翼櫓たつみやぐらで、「竹千代手習いの間は、車いすで行けるんですか？」と聞いたところ、「車いすではちょっとムリですね～」というツレない返事が。「えっ～～～！」

でも、お腹がすき過ぎて、ケンカする元気も残っていなかった。

続きは、次回「駿府城公園編」（6月号）に譲ろう。





「アートをつくる日常 一遊び場の宇宙一」

前号の共同制作に続き、今回は展示！ どんな空間が出来上がる？？



昨年の9月から、静岡大学教育学部 美術教育専修の高橋智子先生と学生さん、そしてそれいゆのメンバーで描いてきた作品の展示が行われました。

(2022年11月21日～12月8日まで 静岡大学附属図書館静岡本館4階ギャラリーにて)

作品づくりと一緒に行う中で感じた事や思ったことを中心に、テーマをどうするか、どのように作品を見せていくかを学生さんが何度も意見を出し合い、話し合いました。

学生さんひとりひとりが、それぞれの思いで案を考え、皆の意見を取り入れながらレイアウトが決まっていきます。

どの学生さんも、楽しそうに語っていることがとても印象的で、展示へのワクワク感が膨らみました。

一緒につくった山のような作品を、それいゆ・静大を4往復して運び、展示の準備が始まります。

図書館の一角のギャラリーに、作品がどんどん運び込まれ、学生さんとそれいゆメンバーのエネルギーが外に溢れ出しそうでした。

出来上がった展示は、まるでおもちゃ箱をひっくり返したよう！！タイトル通り、「遊び場の宇宙」です。

「作品が出来上がっていく瞬間」を皆さん伝えたい、という学生さんの思いが展示に表れていて、制作に使った筆や紙皿、描きかけの作品なども展示され、一緒に作品をつくっている姿が見えてくるかのようでした。真ん中の空間に座れば、なんとなく自分も何か描いてみたくなる。それは決して立派な作品とかではなく、イタズラ書きのような。

何も描かなくても、その空間に座ってみる。目線がグッと下がって、棚の間から周りの作品を覗いてみると…。ちょっとぼんやりしてみる、自分だけの空間に浸ってみる…。

実際に展示を見に訪ってくれた静大生からは、「アートを考えるきっかけになった」「空間が暖かく、居心地が良かった」などの感想が寄せられたそうです。

現実から離れた、ちょっと不思議な宇宙空間がそこにあったように思います。

そして今年は、コラボ展示が街中へ！春の訪れを感じながら、ぜひ足を運んでみてください。

文：鈴木梨可

コラボ展開催のお知らせ

「ギャラリー青い麦」

3/18～3/22

静岡市葵区
呉服町2-2-22
呉服町ビル1F





・アートで人と人をつなぐ人・

静岡大学 教育学部美術教育系列 准教授

たかはし ともこ
高橋 智子 さん
大分県出身

「それいゆ」と一緒に、表現活動を通して地域の繋がりを作っている、
静岡大学の高橋先生にお話を伺いました。

今回は、当法人の運営する「就労継続支援B型事業所それいゆ」のアート活動を陰で支えて下さっている、静岡大学の高橋先生にお話を伺いました。

昨年末に、学生さんたちとそれいゆとのコラボ展「アートをつくる日常～遊び場の宇宙」を静岡大学内の図書館ギャラリーで開催しましたが、高橋先生はその“仕掛け人”です。

インタビュアー：奥村譲

■先生のご専門はなんですか？

美術科教育です。大学では、教員を目指す学生の教育や指導等を担当しています。学生と共に、学校教育における図画工作科や美術科の課題を探り、美術科教育の意義を考えつつ、実践研究や理論研究等に取り組んでいます。

■先生は、病院内学級や特別支援学校や福祉施設などで、病弱な児童や障害のある子どもを対象に「病弱・身体虚弱教育における造形プログラムの開発」等を研究に取り組んでいますね。

長年、病弱・身体虚弱の子ども達を対象に、特別支援学校の先生方と協力して、子ども達の実態に合った図画工作科や美術科の授業づくりについて考えてきました。主に、病院内の院内学級に在籍する子ども達と共に、造形活動や鑑賞活動に取り組んできました。入院中という制限がある中でも、子ども達は生き生きと色や形を用いて自分を表現します。そうした姿に出会う時、入院中の子どもにとって、つくることやみることの意義について改めて自分自身に問い合わせします。最近では、知的障害のある子どもや肢体不自由のある子どもなど、様々な実態の

子ども達の図画工作科や美術科の授業づくりにも関わっています。

■さまざまな実態の子ども達がいらっしゃるんですね。

個によって、実態は様々です。私が関わっている子ども達は、身体の運動・動作の困難さが伴う場合もありますが、図画工作科や美術科は、子どもの可能性（できること）に焦点をあて、それを生かせる教科だと考えています。身体面の配慮が必要になる場合も多いですが、子どもの実態に寄り添いながら、表現を最大限に引き出すことが可能です。図画工作科や美術科での活動では、子どもの実態に寄り添った関わり方や授業内容の提案をすることがとても重要だといえます。

■当法人の就労継続支援B型事業所それいゆとの関わりのきっかけは何でしたか？

みらいーと（静岡県障害者文化芸術活動支援センター）の協力員として、それいゆ職員の鈴木梨可さんと一緒にさせていただいたことが、最初のきっかけです。大学から近い場所にある「それいゆ」で、豊かな造形活動が行われていることを知り感動したことを今でも鮮明に思い出します。

■今年度、静岡大学附属図書館で開催した作品展「アートをつくる日常～遊び場の宇宙」（2022年11/21-12/8）はどのようなテーマ・内容でしたか？

「それいゆ」と連携した展示は昨年度に引き続き、2回目の開催となりました。大学生と「それいゆ」のスタッフやメンバーが協働し、作品展のあり方について考えました。「共生社会の形成及び実現」という大きな目的を掲げ、展示を通して表現する側にも鑑賞する側にも問い合わせ投げかけ、共に考え新しい価値を創造することを目標にしました。特に、本年度は「それいゆ」のメンバーと学生が共同制作に挑戦しており、その作品も会場に展示され、アートを通してお互いの存在を認めつつ共につくりだす日常や瞬間を感じられる展示空間となりました。学生やメンバーのつくりだすもののやことが無限の可能性を秘めているという意味を込め、作品展のサブタイトルを「遊び場の宇宙」としました。鑑賞者が、学生やメンバーのつくりだす宇宙に足を踏み入れ、想像の世界を楽しみ、創造の可能性を感じることができたのではないかと思います。

■私も展示会を拝見しましたが、通常の壁面展示だけでなく、作品の裏側にも作品が描かれていたり、色々なオブジェが置いてあったりして、とても楽しい展示でした。

学生が企画をする際、「それいゆ」の自由で個を認める空間や日常からアートが生まれる瞬間を、来場者に感じてもらいたいという思いを展示に反映させました。完成作品だけではなく、作品が創造されるプロセスそのものが重要だと捉えたからです。展示室の中央スペースには、未完成の作品や画材を配置し、中央スペースを取り巻く壁面には完成作品を展示しました。鑑賞者が、作品がつくりだされるプロセスの中にいることを体感してもらえるように心がけました。

■たしかに、ギャラリーの真ん中にマットが敷かれたスペースがあって、そこに靴を脱いで座って実際にまわりを見渡すと、まるでついさっきまで誰かが絵を描いていた空間に自分がいるような気分になりました。

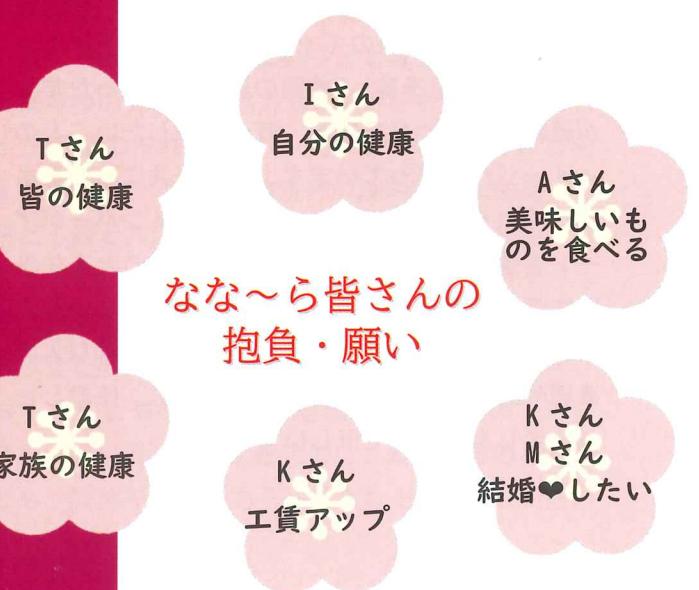
中央スペースに鑑賞者自身が座ることで、アートが生まれる瞬間に立ち会っているような気持ちにもなれますし、アートを生み出す当事者になったような感覚も味わえると思います。また、このスペースでは設置されているノートに展示の感想を書くこともできます。「感想を書く」という行為を通して、鑑賞者にも「自分も一緒に作品づくりに参加している」という感覚や感動を共有してもらおうと考えました。

■それいゆとのコラボは、学生にどのような影響を与えていましたか？

「それいゆ」のメンバーとの交流を通して、とても多くの刺激を受けています。「それいゆ」では、アートがひとをつなぎ、まるで呼吸をするように新たななもの（作品）やことが日常的に生まれています。表現を通して、自分が自分で居ても良いと認められ、とても居心地が良いです。そうした場に足を運び、表現活動へ参加することで、自他にとっての表現や社会の中での表現の意味を考えたり、アートがつなぎ生み出す豊かなもの（作品）やことの価値について考えたりしていると思います。学生はメンバーと同じ表現者という立場で「それいゆ」に関わっています。同じ表現者として共鳴し合い、新たなもの（作品）やことを紡ぎ出すプロセスこそ、学生にとって価値があることだと考えています。

■最後に、今後の展望についてお聞かせください。

実は、次の展示の計画が走りだしています。前回の作品展は静岡大学での実施でしたが、次回の作品展は静岡市内のギャラリーで実施予定です（2023年3月予定）。前回の展示に関わった学生が継続して携わりますが、既に挑戦したいことのイメージが広がっています。学生と共に私自身もすごくわくわくしています。学生やメンバーがアートを通してつながり、新たなものやことを生み出すことに喜びを感じたり感動したりしているように、作品展を通して、多くの人々が様々な人の表現や個性に興味を持ち、それを感じ、感動したり、楽しんだりしてほしいです。



毎年恒例、初詣に行ってきました！

1月8日（日）メンバー6名と世話人3名、ヘルパーさん1名で浅間神社、15日（日）はメンバー4名と世話人2名で護国神社へ初詣に行ってきました。

例年、護国神社に参拝していましたが、今年は8日メンバーの希望で浅間神社まで行くことにしました。

三が日を過ぎていましたが、沢山の人が参拝に訪れていました。皆でおみくじを引いた後、甘酒を飲み、境内を散歩しました。

皆に今年の抱負や願いを聞いたところ左のように語ってくれました。

昼食後、県庁の展望台から静岡市を一望し、静岡市歴史博物館に寄って帰宅しました。

15日は散歩が好きなメンバーさんなので、歩いて護国神社へ出発しました。フリーマーケットが開催されていた中を通り本殿にて参拝しました。お弁当を購入し、なな～ら近くの公園で食べ楽しいひと時を過ごし帰宅しました。

文：清水かおり



生活介護さにい、初のいちご狩り！！

いちご狩りに行きたい！と前々から利用者さんの声が上がって居ましたが、中々機会に恵まれず毎年お預けの状態が続いていました。

しかし、今年は一味違う生活介護さにい。事前準備を怠らず、満を持していちご狩りへ行くことに決定しました！利用者さんのわくわくが伝わって来るようで、当日は期待に胸を膨らませ現地に向かいました。

今回の行き先は藤枝市に在るジャパン・ベリーさん。バリアフリー化が進んでおり、車椅子のままでビニールハウスに入場可能。室内は暖かく、体感的には20℃以上有りそうで受粉を行うためのみつばちが飛んでおり、一足先に春の息吹すら感じられました。

4つのレーンを用意してくださり、その中に入れば実っているいちごは食べ放題！制限時間は40分と長めの設定です。どのいちごも車椅子から手が届く距離に有り、早速ひとつをぱくりっ。口の中に広がる強い甘味の後にある淡い酸味がまた良いアクセントとなり、何個で

も食べられる美味しいいちごでした。コンデンスマルクもありましたが必要な程の甘さです。とは言え、コンデンスマルクを付けたらそれはそれで甘みが増して美味しかったのは言うまでもありません。🍓((ゝΔゝ))

利用者さんも、たくさんの美味しいいちごを堪能し、ご満悦な様子。口の周りに果汁を付けていたのも良い思い出です！帰りには各々がいちごを購入し、自宅で待つご家族や自分用にお土産として買って帰りました。帰りの道中でも、いちご狩りが出来た余韻は中々抜けず、利用者さんは笑顔を浮かべたままです。今回の企画も無事に成功を収め、次のお出かけが待ち遠しいという声が上がるるのは、私たちも嬉しい限りです。今後も利用者さん、みんなと色々な企画を考え実行していきたいと思います。

文：吉岡佑真

ぼくらの 逸品

今回は、当法人の監事でもあり、静岡県の障害者自立生活運動を長らくけん引してきた、井出一史さん（NPO法人障害者生活支援センターおのころ島代表）にご登場願いました。

実は、井出さんには、“もうひとつの顔”があることを、皆さん知っていますか？

それはなんと「仏師」、つまり仏像彫刻家としての顔です。



静岡県藤枝市在住

井出 一史さん（68歳）

NPO法人
障害者生活支援センターおのころ島理事長

1954年、藤枝市の旧東海道宿場町の仏具屋の息子として生まれる。

15歳で音楽家を目指して上京。在学中のバイク事故により車いすの生活になる。3年間のリハビリ後に社会復帰してからは、藤枝市の福祉のまちづくり運動、障害者の自立生活運動などに尽力し、静岡県CIL連絡協議会の代表を長らく務める。

井出さんと言えば、静岡県の障害者運動の“大御所”として有名ですが、実は、曾祖父の代からの伝統を受け継いだ仏像彫刻家としての顔もお持ちなのです！

井出さんの実家は、藤枝の旧東海道の宿場町に面したところにある仏具店です。

先祖を遡ると、江戸時代には桶屋だったそうです（昔の東海道絵図にも載っているとか！）。桶屋といつても、かつては、棺桶用（座棺）の桶も作っていたようで、その後、葬式用具全般を扱う仏具屋に発展しました。曾祖父の代より仏像彫刻も手掛けるようになり、井出さんのお父さんは、彫刻家としても活躍されました（パリ留学までしたこと！）。

井出さんは、幼いころから、そんなお父さんの仕事ぶりを眺めて育ちました。

ところが、井出さん自身は音楽が好きで、「音楽家になりたい」と志を立てて高校から単身上京。高3の時の交通事故がもとで車いすの生活になりました。

音楽家への道が絶たれ、将来について暗中模索をしていた頃、さらなる試練が。

お父さんが60歳の若さで、心筋梗塞で倒れたのです。

お父さんが亡くなる間際、見舞に訪れた時、病床のお父さんを前に、「父の仕事を継ごう」と決心したそうです。

それからは、お父さんが残した彫刻刀で、ど

のように工夫すればハンディがある手で彫ることができるか自分なりに試行錯誤。ようやく一体の仏像を彫り上げができるようになりました。その後は、阿弥陀如来、大日如来、釈迦如来…次々と仏像を彫り、やがて個展を開催するまでに。

ハンディがあるため、人一倍時間がかかり、50センチの仏像を彫り上げるのに一年もかかります。

これまでに20～30体の仏像を彫りましたが、すべて寺や個人が所有し、自分の手元には僅かしか残っていません。

井出さんのこだわりは、あくまでも一木造り。つまり、1本の木材から仏像の全身を彫り出すものです。継ぎ足しはしないので一発勝負でやり直しがききません。

もし、鼻を彫りすぎたら最後、もう捨てるしかありません。これまでに何体も火にくべたそうです。

まさに一刀一刀が勝負。

それが一木造りの魅力でもあるそうです。

最後に、井出さんがこの一木造りに込めた思いを詩にしたものをお紹介しましょう。（右）

文：奥村譲



醍醐を勝たず絶しまり
醍醐のスリルが
落とした
味だ
負らぬもどりた
かが
かが



合掌観世音左たて

釈迦

日蓮



杉山元太のこんな家に僕も住みたい! ビギン移転先探し奮闘記



昨年の10月から、「自立体験ハウスビギン」(以後:ビギン)の移転先を探している。

ビギンでは、実際に1人暮らしをする前の疑似体験ができる。現在のビギンは、一般的な2DKの賃貸アパート1階。車いすでは簡易スロープを取り付けて何とか玄関から入室することはできるが、幅が狭く、車いすユーザー1人の入室が困難な現状がある。簡易電動車イスに乗って生活をしている私の自宅は、車いす使用者対応型の公営団地。それに比べると、今のビギンは入口の段差や、トイレの狭さ、部屋の開き戸等、使いにくいところがたくさんある。

そこで車イスでも入りやすく、動きやすい部屋を改めて探していくことになった。

【自立体験ハウスとは】

- ・自立を目指す障害当事者が、一般的な賃貸アパートで実際にヘルパーを使いながら自立生活(一人暮らし)を体験する場です。
- ・日中のみの体験や、食事作り、入浴のみの体験、実際に宿泊しての体験等、その人に合ったペースで自立に向かう体験をることができます。
- ひまわり事業団でも、自立体験ハウス「ビギン」を運営していて、いろいろな方の自立生活へのサポートを行っています。※写真は現在の「ビギン」室内です。

物件探しの日々…

一人暮らしをしているものの、実際に物件探しをしたことがない私にとってどんなことから始めたらしいのか分からず、不動産会社の物件サイトを検索してみても、どんなサイトを見ればいいのか、どんなポイントを大事にしながら物件を見つけていけばよいか、何もかもが初めてのことばかりで、サイトのページは見ているものの不安な気持ちばかりが広がっていました。そこで、自分の背中を押してくれたのは、これまで物件探しをして実際に一人暮らしをしている当事者スタッフからのアドバイスだった。「不安な気持ちちはわかるけれど、まずは気になった物件を見に行ってみよう!そして、実際に自分で見て、使いやすいのかを感じていけばいいよ」と声をかけてくれたことで、自分自身の不安が軽くなり、物件を見に行くことを楽しもう!と前向きに考えられるようになった。

最初の頃は、不動産会社に電話で話す時、こちらが聞きたいことだけを聞いてしまい、相手にわからないことを質問したり、再度確認したいことを聞き返すことができず、不十分なやり取りになってしまったことがあった。しかし、回数を重ねていく中で、分からなかったことや、もう一度聞きたい事を、自分から聞き返せるようになった。

見に行きたい!でもなかなか車イスでは、内覧できない……

実際に部屋の中を見る為、内覧の予定の電話をかけてみると「内覧はできますが、車イスでの入室はできません」という回答や「大家さんに確認してみましたが、大家さんのご意向で、車イスでの入室はお断りしています」というように、『車イスに乗ったまま内覧をする』ということが予想以上に難しいことを痛感した。不動産会社の方や、大家さんたちと共に話し合いをしながら、一緒に行った介助者に写真を撮ってもらい、室内をチェックしたり、不動産会社の方から後日、写真データをもらったこともあった。そのような中でも、車イスでの内覧に協力してくれた不動産会社に出会えたことも何度かあった。電話では断られてしまっても「どうしても、実際に現地で幅や広さを確認して、車イスで通ることができるか試したい」と思いを伝えてみると、「それでは、ぜひ車イスで室内も見られるように調整します」と、前向きに方法を一緒に考へてくれる時もあった。断られてしまいそうな時に

どう伝いたらできるようにすることができるのか。自分の場合は、日頃から介助を受けながら生活をしているので、一人ではできないことを手伝ってもらうことがたくさんある。その中で、相手にうまく伝えられず、落ち込んでしまったり、介助者に任せてしまい、一番大切な「自分で伝える」ということをどうやったら相手にわかりやすく伝えることができるかについて、今一度、自分と向き合うことの大切さを気付かせてもらった。

見に行って、実際に動いてわかった!行動からはじまる、関係性をつくる大切さ。内覧に行く前に、部屋のレイアウトを見てはいくものの、幅や広さといったものは、実際に現地に行って、自分で見て動いてみないと、通れるか通れないかがわからないものだ。内覧の際に不動産会社の方に「実際に車イスを使っている方と内覧する機会がなかったので、広さや幅が大切だとわかりとても勉強になった」と話していただいたことがあった。見に行くまでは、部屋に入れるのかという不安な気持ちや、うまく不動産会社の方に話せるなど、緊張するが、「わからないことや、不安に思っていることはどんな事も聞こう」という気持ちで不動産会社の方に話しをしていたら、お互いに新しい視点に気付くことができることにも嬉しさを感じた。「関係性を大切に作っていく」とは、こうやって一つずつ困難を共に考え、悩み、乗り越えていくことで深まっていくのだろう。

僕の想い……

物件探しは今も続いている。今回の物件探しの活動を通じて、「現実とどう折り合いをつけていくか」ということの大切さを学んだ。自分が住みたい家は、一人一人違うものだ。自分だけの視点だけではなく、いろいろな方と交流をして情報を集めたり、暮らしていくときに、何を大事にしたいのか、優先順位を整理しながら一つ一つ現状と結びつけてゆくことで、多くの可能性が広がっていくことを強く実感している。「誰もが自分の気に入った家に住みたい」という気持ちは持っている。今回、実際に動いて不動産会社の方と関係を作れたように、不動産会社の方や地域住民の皆さんに、今回の取り組みに少しでも興味関心を持ってもらい、障がい当事者の地域での自分らしい生活が広がっていくきっかけになれたら嬉しい。がんばって、新しい物件をみつけるぞ~!



とおるのトーク

正月に、おせちを三日かけて食べたぼくは食傷気味になり、胃もたれして、しばらく食べる気がしなくて困った。消化が良く野菜も摂れる七草粥を正月七日に食べるというのは理にかなってる、と改めて先人の知恵を考えた、2023年はこうして幕が上がった。

マアそれだけなら、普通に平安だったのに、加えて新型コロナの濃厚接触者がヘルパー2人から出てしまい、8日間自宅待機の間、代わりのヘルパーが見つかるまで心配だった波乱の幕開けでもあった。

この新型コロナも3年目じゃん。ぼくたちは、もし自分が感染したら介助は必要最低限になってしまう訳だし、濃厚接触でも同じ。こんなことに、いつまでびくびくしながらなきやいけないんだろう？そろそろ感染症法5類の扱いにしてほしいよね。ワクチンは自己負担になるかもしれないけれど、季節性インフルエンザと同じで充分だ、と思っていたら、5月8日から5類になるようだ。

長かったなあ、新型コロナ生活。同調圧力でマスクしないと悪い奴ととられたり、おかげで名古屋のジブリパークはもとより、映画館にも足が向かず、近くの教会も行けずにいた。呼吸が楽になるマスクフリーはうれしい。一時(いっとき)物議になったアベノマスクはどうなったんだろう？3年のコロナ生活の中で新たに出会ってマスク姿しか知らない人も増えた。あの人ってマスク美人かなあ？マスク外したら別人だったりして…あっ、これ以上書くとセクハラで顰蹙(ひんしゆく)を買いそうだ。

でもって、日々ニュースを見ていて、去年から続く防衛費の倍増はとても気になる。金額ありきで使い道もあいまい、おまけに国民への説明は一切ないと來てる。平和憲法に基づいて専守防衛の理念を守りながら、戦争をしない国として世界でも認められてきたものを軍拡競争の仲間入りで、捨ててしまうのには断固反対だ。

いつからか閣議決定で日本の行方が決まってしまう。集団自衛権のときもそうだった。今度は防衛費の倍増ときた、憲法9条を守る気などないと言わんばかりの敵基地攻撃能力の保有、結局アメリカが作りすぎたトマホークを買わされて、まさかの復興税をそれに充てる、冗談のようなことが閣議決定で決まるようになっている。

国の形を変えるようなことは本来民意に問う選挙で決めるべきことだ。そもそも専守防衛を逸脱している。防衛費はGDP比1%を超えないとい三木内閣のときに決まっていたはずだ。安倍政権以降ちやぶ台返し的に政策が決まるという危険な事態に至っている。安倍政権ってしょうもない前例を沢山残したと今も思っている。

迎えの家の梅の木にも花が咲いたよ。気球が来ようがトルコで地震が起きようが、季節は進み春が来る。このコラムが読まれる頃は桜が咲いてることと思う。

でもって今回もウクライナの平和を祈ってコラムを終わる。

文：橋本徹

障害を持つ人の生活を支援する
ヘルパー
募集中

お気軽に
お電話ください
054-287-1230

【編集後記】今回取材に行った臨済寺では、本堂まで電動車いすで行けたのにはびっくりすると同時に感動しました。

本堂から眺めた静岡の街の景色、本来はあそこに駿府城の天守閣がそびえ、竹千代もこの景色を眺めていたんだな～と思うと感慨深いものがありました。

一方、浅間神社は私の自宅のご近所でいつもの散歩コース。道路の傾斜から段差まですべて頭に入っているので感動は薄かったです。浅間神社から駿府公園へ向かう無料シャトルバスは、慣れているジャストラインの車両だったし、運転手の対応もとても丁寧で快適でした。このバスは、静岡市歴史博物館の駐車場まで行ってくれるのでとても便利です。

文：理事長 小久江寛